

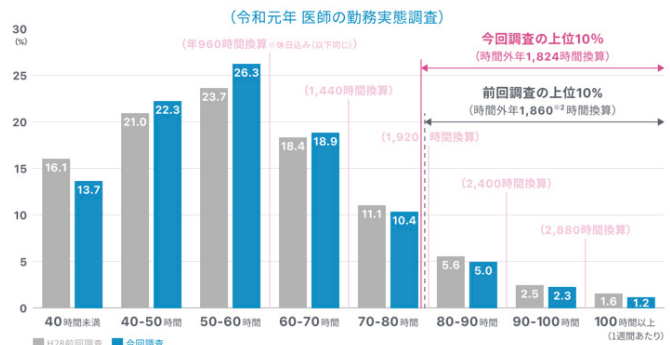
長時間労働が常態化している医師の働き方を変えたい。
『Airシフト』を活用した医師の最適配置で、
“子どもの行事参加”や“長期休暇”が可能な職場に変革



2024年4月に改正法が施行され、医師の働き方改革は待ったなし

- 厚生労働省の令和元年調査では、医療機関で働く医師の約40%が月80時間以上、約10%が月152時間以上の残業（時間外・休日労働）を行っている。
- 少子高齢化が進み、人手不足も深刻。医師が健康的に働き続けられる状態でなければ、もはや日本の医療システムを維持できない。
- 2024年4月に施行された医師の時間外労働の上限規制では、原則として、時間外労働時間が年960時間、月100時間未満に制限されることに。

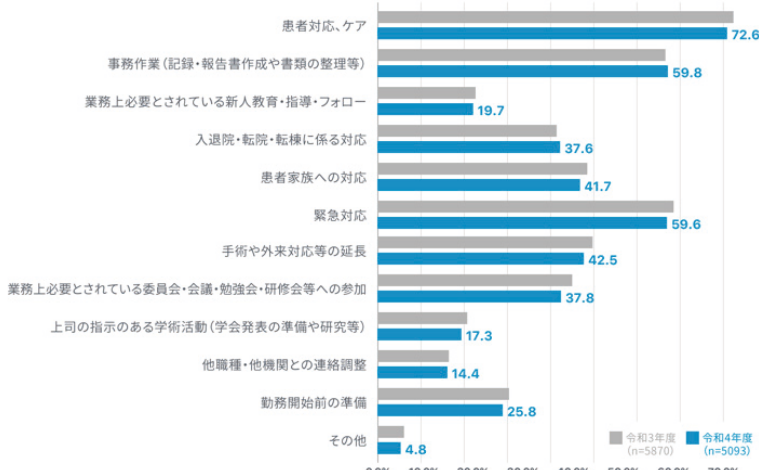
病院常勤勤務医の週労働時間の区別割合



(出典：厚生労働省「令和元年 医師の勤務実態調査」)

医師の働き方の特徴は、勤務体系が複雑で突発的な業務が発生しやすいこと

医師の時間外労働の理由



(出典「令和4年度「医療分野の勤務環境改善マネジメントシステムに基づく医療機関の取組に対する支援の充実を図るための調査-研究(一部抜粋)」より」)

- 医師の時間外労働の主な理由は、「患者対応、ケア」や「緊急対応」など専門資格を持つ医師にしかできない業務が多くを占める。
- 一方で、書類作成など煩雑な業務の多さも、時間外労働につながっている。
- 医師の働き方改革が難しい要因のひとつは、勤務実態を把握しづらいこと。
- 日勤・夜勤・宿直など勤務パターンが複雑で、緊急対応なども発生しやすい。
- 労務管理を適切に行うことが、医師の働き方改革の第一歩だと言える。

コロナ禍の“超過重労働”を経験した医師が進める、本気の働き方改革

『Airシフト』で医師の勤務体制を適正化し、シフト作成業務も1/5に短縮

コロナ禍で医療現場がひっ迫。医師の労働環境を変えねば医療は成り立たないと考える契機に

- 愛知医科大学病院の麻酔科部長を務める野手英明教授。今でこそ働き方改革を強く推進しているが、自身は長時間労働が当たり前の価値観で育った世代。「患者に向き合う医療の仕事は定時ぴたりで帰るなんてほとんどない世界。でも、使命感を持って働いていたし、経験を積むためにも必要なことだと思っていた」と語る。
- もちろん、可能ならもっと健全な働き方をしたい気持ちもあった。年齢を重ねるうちに体力的に辛くなっているし、ワークライフバランスを重視したい若手医師の価値観も尊重したい。しかし、どこの医療現場でも医師は人手不足。「人員を増やすことができない以上、この働き方を変えるのは無理だろう」と感じていた。



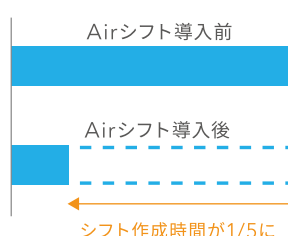
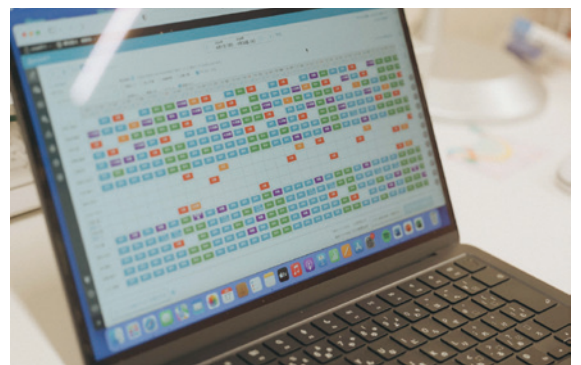
- そんなときに、新型コロナウイルスのパンデミックが発生。平時でさえ慢性的な人手不足だった医療現場は、コロナ患者の対応や感染対策などでこれまで以上の過重労働を強いられてしまう。「**コロナ禍では、通常なら1時間で済む業務に3~4時間かかっていた。**しかも、体調不良のスタッフは感染拡大防止のために欠勤させねばならない。常にギリギリの綱渡りで、“医療崩壊”の文字が頭をよぎった」と語る。



- この経験が、野手教授の心に火をつける。「**医療従事者がこのままの働き方を続けていては、日本の医療に明るい未来はない。本気で働き方改革に取り組もう。**」おりしも、2024年4月からの医師の時間外労働時間の上限規制があと数年に迫り、医療現場で周知が広まってきたことも契機になった。
- 2023年4月、法改正まであと一年となったタイミングで現在の勤務先である愛知医科大学病院へ赴任。麻酔科医師の勤務シフトを管理する立場として、自組織の働き方改革に本格的に着手した。

いつでもどこでも誰でも、最新のシフトを確認できる『Airシフト』で、医師の勤務体制を適正化

- 初めに課題感を持ったのは「シフト作成・管理業務」。紙や表計算ソフトでシフトを組んでいく一般的な方法では、毎月合計5時間ほどかかっていたが、『Airシフト』の導入により、希望シフトの収集～シフト表への転記作業が自動化。最適なシフトのパターンをAIが提案するアシスト機能などの活用により、作成時の手間が大幅に効率化され、シフト作成業務は毎月合計1時間程度に短縮できた。「**管理業務が効率化できた分は、若手医師の指導により時間を割けるようになった**」と語る。
- 最大の変化は、クラウドサービスである『Airシフト』によって最新のシフト表がいつでもどこでも誰でも閲覧できるようになり、シフトの調整を柔軟かつタイムリーにできるようになったこと。
- 緊急対応や、手術時間の延長が発生しても、『Airシフト』ならばすぐに全体のシフトを組み直して全員に一斉共有可能。**一時的に業務量が増えている(増えそうな)場所へ応援の人員を送るといった措置が取りやすくなり、業務負荷が分散。**長時間労働の抑制につながっている。



タイムリーなシフト調整を実現し、「医師＝休めない」から脱却 働き方改革を起点に、医療の質の向上を目指す

勤務間インターバルが適切に取れる状態。休暇の希望もかかないやすくなった

■ 以前は長時間労働になったとしてもシフトの変更がしづらいために、一度も家に帰れないまま翌日の勤務が始まることもあった。それが、『Airシフト』を導入することで、長時間労働が発生している場合には、後ろのシフトを調整することで**適切に休憩・休暇を取らせることが可能に**。法改正によって努力義務化された「勤務間インターバル(勤務終了から次の出勤までに一定時間以上の休息時間を設けること)」を実現できた。

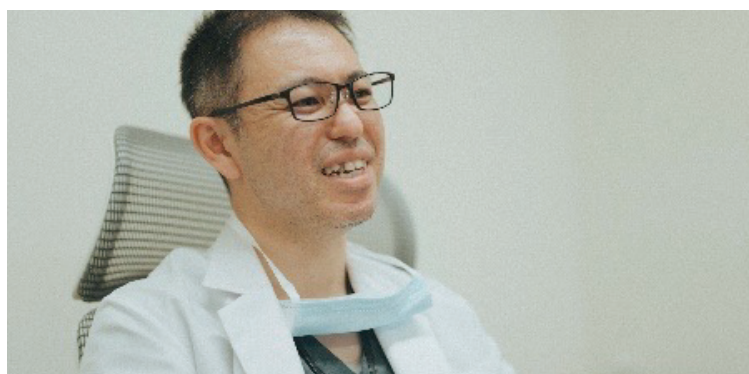
■ スタッフに好評なのは、『Airシフト』と連携するアプリ『シフトボード』によって、手元のスマートフォン上で希望シフトや変更依頼、休暇申請が出せること。以前は、休暇が取りたいときには多忙な上司を捕まえて“お伺い”を立てる必要があったが、システム上でのやり取りに集約することで、過度な配慮や忸度なく希望を出せるようになった。管理者である野手教授も「口頭で相談されるよりも確実に対応できるし、下手に遠慮されるよりも早めに言ってくれた方が調整できる。休み希望はほぼ実現できている」と語る。

■ 野手教授が理想に掲げているのは、「**スタッフが家族(子ども)行事にフル参加できる状態**」。実際に、これまでは子どもの学校行事を諦めていた医師が、授業参観や運動会などに参加できるようになった。雨で運動会が順延になったときも、『Airシフト』ですぐにシフトを再調整することで、当該スタッフは無事に参加できたそう。

■ 休みやすくなったのは、全体の勤務・休暇状況を可視化できたことも大きい。「**みんなで協力しながら休めるときに休む、“おたがいさま”の風土が醸成された**」と野手教授は語る。クラウド上で誰もがシフト全体を閲覧できるため、管理者だけでなく医師一人ひとりが周囲の勤務状況を理解しており、シフトの変更が必要なときも納得感の高い調整(代休の設定など)がしやすくなっている。また、以前は「長期休暇なんて、よっぽどの事情がない限りは無理だった」そうだが、早めに夏休みや冬休みの予定を立てることが可能になり、海外旅行を実現させた人も。



医師の働き方改革を進めることは、医療サービスの向上にもつながるはず



■ 野手教授が責任者を務める麻酔科の医師たちは、手術に必要不可欠な存在。麻酔科医が効率的に働けるようになると、1日に対応できる手術数が増えるという。「**患者にとっては“手術待ち”の期間を短縮できるし、関係する看護師や他科の医師たちの効率も上がる**。そして、手術室を効率的に活用できるため、病院の経営上もプラスなのだ」と、自組織の働き方改革が進む貢献度の高さを語ってくれた。実際に、『Airシフト』導入後の2023年度は同病院における過去10年最大の手術数を実現している。

■ 「これまでの医療業界は、医師を含む医療従事者の自己犠牲の上に成り立っていた」と野手教授は振り返る。しかし、家族との時間などプライベートを犠牲にし続けると、患者さんへのホスピタリティは下がってしまう。**適度なリフレッシュや、大切な人と過ごす時間は、スタッフのホスピタリティを高め、医療サービスの質を高めることにも繋がっていくのではないかと**。

■ 一方で、若手医師の指導を務める野手教授としては、働き方改革と並行して医師の“育て方(学び方)”にも改革が必要だと問題提起する。「これまで、医師はとにかくたくさんの患者や症例に向き合うことで知識・スキルを積んでいくことが常識だった。しかし、もはやそのやり方に固執している場合ではなくなっている。**これからは短い時間で質の高い学びを提供することにも挑戦したい**」と展望を語ってくれた。



インタビューの様子

- ① 院内を笑顔で歩く野手教授
- ② パソコンでAirシフトを開く様子
- ③ スタッフと会話する野手教授
- ④ 野手教授のお部屋には多くの学術書が並ぶ
- ⑤ 手術室に入っていく野手教授

